

節蔵（『灰燼』）とメフィスト、あるいは「ニヒリズム」の行方

——鷗外と『ファウスト』（その四）

田中 岩男

1. 「なくてはならない道連れ」

あるドイツのファウスト研究者は、数ある中世の魔術師伝説のなかにあって、ファウストをファウストたらしめるいわば「不可欠の定数」として、つぎの四項目を挙げている。

「1. ある種の認識論的な問題 2. その結果として生じる悪魔との契約 3. キリス教的空間 4. 近代という時間的枠組み」¹⁾。

ファウスト伝説にとって「悪魔」は必須の一要素である。

だが啓蒙の18世紀を迎えると「悪魔」はその存在じたい信用を失墜し、本来ファウスト素材がはらんでいた深刻な問題性は、くずれた民衆劇や人形芝居の舞台で消失の危機に瀕するようになる。そうした時代に「ファウスト劇」を書くことの困難さは、ゲーテの一世代先達になる啓蒙主義作家レッシング(1729-1781)の場合を思うだけで十分想像がつく。彼の「市民悲劇」ファウストの構想を伝え聞いた友人のモーゼス・メンデルスゾーンは、「ほくは、その名が呼ばれるのをあまり聞きたくないものだね」と遠回しに諫め、「〈おお、ファウストよ、ファウストよ！〉この叫びを聞いただけで平土間全体が笑いだしてしまうかもしれないからね」（1755年11月19日付、レッシング宛書簡）と忠告している——。ゲーテが「悪魔との契約」の難題解決に最後まで腐心し、「契約」が「賭け」になった裏にも、おそらく同じ事情がかかわっていた。しかし逆にそのことは、ファウストにとって悪魔がいか「必須」の存在であるかの証左でもあろう。メフィストフェレスなくしてファウストはありえない。

それにしても「メフィストフェレスとは何者か」あるいは「メフィストはいかなる存在か」と正面切って問題にしようとする、たちまち新たな難問に直面することになる。講演「ゲーテの『ファウスト』について」（1938）においてメフィストに相当な

1) Peter Michelsen: Im Banne Fausts. Zwölf Faust-Studien, Würzburg 2000, S. 224.

スペースを割り、メフィストを「あらゆる文学作品のうちで最も天才的な、最も印象深い、最も生き生きとした悪魔の形姿」と称えたトーマス・マンは、この近代的悪魔に「ゲーテの青年期の巨人主義の反語的な自己修正」を読みとっている²⁾。たしかに『ファウスト』の複雑な成立史を反映して、メフィストにもそうした一面のあることは否定できない。が、それだけで片づけようには、この魅力的な人物は複雑に過ぎるようである。ファウストはいちど彼を「さすが反対と矛盾の霊だ！ Du Geist des Widerspruchs!」(V.4030)と呼んでいるが、矛盾・撞着じたいがその本質の主要な一部をなすようなこの捉えがたい人物こそ、作中「最も天才的な、最も印象深い、最も生き生きとした形姿」であることは間違いない（役者にとっては、主人公のファウストにもまして魅力的な配役であろう）。

いずれにしる、ファウストのいう「おれにはもう／なくてはならない存在となった道連れ」(V. 3243f.)を措いて、ファウストという存在は考えられない。そのことは、随所にきわめて隠微に暗示されている。—— 出会いの場、助手と復活祭の散歩に出たファウストが、「飛翔の夢」に耽りながら「新たな衝動」の目覚めについて語り、胸に住む「二つの魂」を表白した直後、「道連れ」は黒いむく犬の姿で近づいてくる。「どうやらあいつは、未来の縁を結ぼうと、／われわれの足の周りに目に見えぬ魔法の環を描いているらしい」(V.1158f.)。「むく犬」は、ファウストの内面の事態に正確に呼応するように出現する。

ファウストとのあいだに一種の契約が成立し、「新生活への門出」の支度にファウストが退出したあとのメフィストの台詞は——「(ファウストの長いガウンを着込んで) 理性だの学問だのという、／人間にさずかった最高の力をせいぜい軽蔑するがいい。／……／そうなれば、きさまはもう絶対におれのものだ——／……／たとえ悪魔に身を任せなかったとしても、／どのみち、あいつは破滅に落ちるほかはない！」(V.1851ff.)。

ダッシュ（——）を間にして、独白の前半と後半とで呼びかけの人称代名詞が二人称（「きさま Du」）から三人称（「あいつ Er」）にさりげなく変わっている。そしてそのモノローグを語るのは「長いガウンを着込んだ」だ、つまり学者ファウストに扮した「悪魔」である。「メフィストはいわばファウストの暗い裏面ないし影を体現している」

2) Thomas Mann: Über Goethe's *Faust*. Gesammelte Werke in dreizehn Bänden, Bd. IX, Frankfurt/M. 1974, S. 601.

—これは、ある注釈の解説だが³⁾、ここにも両者がほとんど表裏一体で切り離せないことが巧みに示唆されている。

巧みな「示唆」は、もちろん、テキストそのものにも潜んでいる。一、二顕著な例を引く。

しかし、本当に心から出たものでなければ、
けっして人の心にとどきはしないものだ。 (V.544f.)

なぜって、人の心にはたらきかけようと思うなら、
心から出たものでなければね。 (V.9685f.)

前者は、「話術」を習得したいという助手ワーグナーに答えた「第一部」のファウストの台詞、後者は「第二部」でヘレナの女執事に扮したフォルキアス=メフィストの台詞である。そのあまりの酷似は唾然とさせられるばかりで、おそらく、マンの指摘する「役割の交換」ということだけでは済まされないだろう。この種のことは枚挙にいとまがない。

たとえば、ゲーテはしばしば重要な台詞を好んでメフィストに吐かせている。

煩悶をもてあそぶのはおやめなさい。
それは禿鷹のようにあなたの生命をついばむだけです。
どことなくだらぬ連中とでも、つきあってみれば、
人間、仲間あってこそ人間だということが分かりますよ。 (V.1635ff.)

ファウスト相手のメフィストのことばだが、まっとうすぎて当惑してしまう。極め付きは、『ファウスト』全篇中でも最も人口に膾炙したとっていい台詞のひとつ。

いいかい、君、すべての理論は灰色で、
緑なすのは、生命の黄金の樹だ。 (V.2038f.)

3) Vgl. Lektürehilfen Johann Wolfgang von Goethe: Faust 1/2 von Eberhard Hermes, 7. Aufl., Stuttgart 1994, S. 44f.

しかもこの台詞が、例の「長いガウンを着込んで」扮した「ご高名な先生」の口から、「地上のことも天上のことも究め、／科学と自然に／ともに通じたいのです」(V.1899ff.)と意気込む新入学生——いわば在りし日の「ミニファウスト」——相手に吐かれていることを思うと、そこに込められた含意のニュアンスはいよいよその陰影を濃くするはずである。

あらためて「メフィストフェレスとは何者か」——とりわけファウストを「近代的人間の典型」と捉えるとき、そこでの「悪魔」メフィストはいかなる存在なのか。そして同じ問題は、鷗外においてどのようにあらわれているだろうか。ファウストの単なる誘惑者、敵役といった「脇役」以上の存在であることは無論いうまでもない。

2. もう一人の「青年」

鷗外の手掛けた小説のなかに、未完に終わったこともあり、あまり知られているとはいえないが、注目すべき一編の長編がある。『青年』擱筆の2カ月後(明治44年10月)から「三田文学」に連載が開始され、間に2度の休載を挟んで翌大正元年12月まで書き継がれ、中絶した『灰燼』である。『青年』の連載最終回に付された「鷗外云」によれば、「一応これで終と」されたその前作は「書かうと企てた事の一小部分しかまだ書か」れていない、という。額面どおりには受け取れないとしても、「自分の画がくべきアルプの山は現社会である」とした純一の当初の企図はどうしたのか、別れたきり小説世界に再登場しなかったお雪さんとの関係はどうなるのか等々、気になる点はいろいろ残されている。とすれば、ほとんど間を置かず開始された新しい連載小説に、そうした問いへのヒントなりを読み込もうとするのは無理からぬことと思われる。

成心なく読んでも、たしかに、この二つの長編にはいくつか顕著な共通点が認められる。主人公の小泉純一と山口節蔵は地方から上京したばかりの、年齢もほぼ等しい小説家志望の「青年」である。特に学校には通わず自由に作家修業に日を送っている純一に対し、縁故を頼って、さる有力者の家に書生住まいをして「三田の某学校へ通って」いる節蔵という違いはあるが、節蔵の身辺にも「二つに分けて編み下げた髪が長く背後に垂れている」(参) 娘の姿がしばしば見受けられる。当主の一人娘で、華族女学校へ行っている14になる「お種さん」である。——要するに、行き詰まって「一応……終と」した小説を、いわば一度リセットし、新たな構想のもとに再挑戦したといった趣なのだ。

両長編の舞台の時間的なずれは、新小説における新たな構想に起因するものと思われる。すなわち、『青年』が「ポルクマン公演」のあった明治42年を舞台に、「卵から孵ったばかりの雛ひよこのような目」をした青年の視点から語られるのに対して、回想形式

をとる『灰燼』は、鷗外の小説執筆時に正確に合わされた、明治44年に29歳の節蔵の視点から、11年前に遡る「書生生活」が語られる。もっとも、その生活は2年間続いただけで（おそらくはのっぴきならぬ事情のために）突然打ち切れ、実際に語られるのは、小説じたいが中断されたため、最初の3カ月ほどに過ぎないのではあるが——。かつての恩人の葬儀の帰途、俚に揺られながら、まるで第三者のこのように「愛惜もなく、悔恨もなく、極めて冷やかに想い出していた」という壱章の結びが暗示するように、弐章から始まる「回想」は、ある夜、ふと思立って節蔵が「新聞国」という諷刺的な小説を書き始め、その国の政変を構想するうちに寝入ってしまうところで唐突に断ち切られる。後年の随想『なかじきり』（大正6年）で、「小説においては……長篇の山口にたどり附いて挫折した」といわれる所以である。

年譜によって確認してみると、鷗外が『青年』の筆を擱いて『灰燼』の連載にとりかかり、結局その長編も中絶することになる1年数カ月は、まさに彼が文芸委員会からの委嘱（44年7月）を受けて『ファウスト』の翻訳に着手し、驚異的な速さで順次訳出・刊行（『第一部』大正2年1月、「第二部」同年3月）してゆく期間にすっぱり収まっている（訳語がほとんど口を衝いて出てくるほど、すでに彼がテキストに深く親しんでいたであろうことを窺わせる）。とすれば、いわば同時進行的に進められた創作と、それに勝るとも劣らず重要な「翻訳」とのあいだに、まったく何の関係もなかったと考えるほうがむしろ不自然であろう。それを証しするように、小説のある個所で鷗外は、さりげなく Faust の名を持ちだしている。9年間音信を断っていたかつての家長の訃報に接し、会葬に訪れた寺で葬儀を待つあいだ、縁側にかけて書き物をしている節蔵の傍に近所の子供が近寄ってくる場面。

「この子供が丁度 Faust に近寄ってくる^{いぬ}狗が、初め大きい^わ圈をかいて廻り、段々小さい^{せま}圈をかいて廻って来るように、とうとう袖に触れるまでになるのを節蔵は知っていて構わずにいた」（壱）。

ファウスト「君あれが^{でむし}蝸牛の背の渦巻のような、広い^わ圈をかいて、／次第々々に我々の方へ寄って来るのが分かるか。「^わ圈が段々狭くなった。もう傍へ来た」（V.1152ff 森林太郎訳）。

例の復活祭の散歩に出たファウストに、夕方、メフィストフェレスが「黒い彪犬」の姿で近づいてくる場面であるが、これをもって節蔵をファウストになぞらえようとした、と主張しようというのではない。注目すべきはむしろこれに続く一節で、子供が傍に置かれた彼の Panama 帽に手を伸ばそうとすると、一瞬、節蔵は恐ろしい本性の一端をかいま見せる。

「その時節蔵は万年筆の手を停めて、子供の方へ正面に向いてただ一目子供の顔を見た。しかしこの時の節蔵の顔はよほど恐ろしかったものと見えて、子供は行きなり差し伸べた手を引っ込めて、二三歩跡へ下がった」(巻)。

時々メフィストが仮面のような顔の奥からのぞかせる、デモーニッシュ(〔悪〕魔的)とでも形容するしかない、見る者を全身凍り付かせるような「恐ろし」い目がこれである。それは孵化したばかりの「雛のような目」のおよそ対極をなすものであって、青年の目というより、むしろ老成した『妄想』の「翁」のそれに近い(『灰燼』の連載に先んじて鷗外は、その思想的な基礎固めでもあるかのように、同年「三田文学」の3・4月号に『妄想』を発表している)。

鷗外の二つの長編は、構成上の一見の近似にもかかわらず、主人公となる二人の「青年」の造型において決定的に異なっている。とすれば、『青年』において本来「書こうと企て」られながら、「書かず」に、『灰燼』に課題として残された部分とは何だったろうか――。

『青年』の前年に書かれた『当流比較言語学』のなかに、「芸術家の物を作る動機」に触れて「人間の心は醜悪なものだ」と前置きし、「醜悪の心を書く poseur も無いには限るまい」という一節がある(因みに「ある国民にはある詞ことばが關けている」実例として、日本語における Streber にあたる詞の欠如を挙げ、『ファウスト』のキーワードともいうべき streben について縷説したのは当の評論である)。鷗外が poseur (気取り屋) だったかどうかはともかく、『灰燼』の主人公が同様の主張を展開している。それは、どうみても18歳の作家志望の青年の思想というより、本格的な執筆活動の再開にあたって試行錯誤する50歳の作家自身のものであろう。

「なんでも世間で美しいとか、善いとか云う事は刹那かがやの赫きである。近寄って見ると、灰色にきたない。文字で光明面を書くとか云うのは、刹那の赫きを書くので、暗黒面を書くとか云うのは、事実を書くのである。……己は刹那の赫きに眩惑へきこうせられもせず、灰色に耽溺もししない。己はあらゆる価値を認めない。いかなる癖好をも有せない。公平無私である。己が何か書いたら、誰の書く物よりも公平な物を書くから、……世間の奴は多分冷冽な文学だと云うだろう」(拾肆)。

『青年』において、東京方眼図を片手に大都会を闊歩する、「理想主義の看板のような、黒く澄んだひとみ」をした若者を主人公に、青春の「赫き」、その「光明面」を描こうとして行き詰まった鷗外は、『灰燼』では一転して――表題にも暗示されるように――理想の夢がついえ幻滅に終わる青春、その「暗黒面」を描出しようとする。それは「事実」に密着し、己れの内面を仮借なく剔抉して「醜悪の心」をもさらけ出す、

「冷冽な文学」を企図していたであろう。両長篇に対する識者たちの評もそれに照応しているように思われる。

鷗外論もあるドイツ文学者高橋義孝は、『青年』を「紛れもない〈教養小説〉」であるという（新潮文庫版『青年』、1948年「解説」）。周知のように教養小説とはドイツ小説に由来する文学用語で、タブラ・ラサのように無垢な主人公が、生きてゆく時代と社会のなかで様々な体験をしながら内面的に成長発展し、人間として自己形成を遂げてゆく過程に重点を置いて描こうとする長編小説とされる。高橋評に符節を合わせたように、作家福永武彦は『灰燼』を「裏返しにされたBildungsroman」と評している。「これは『青年』と違って、青春の敗北、或いは青春の挫折を主題とした小説」⁴⁾だというのである。「裏返しにされた……」の当否はひとまず措くが、清水茂はさらに一歩進めて『灰燼』を「鷗外が意企した最初にして最後のピカレスク・ロマン」と論定し、主人公山節蔵のなかには「日本〈近代〉の悪の醒覚者、自覚者たろうとする鷗外の、つめたく、くらい、灰色の、〈否定〉への関心」ないし「情熱」が「流動しはじめている」⁵⁾という。また、『灰燼』において鷗外は「影法師のように付きまとうもう一人の自己を、一個の悪のヒーローとして造型しようとして、挫折した」⁶⁾という田中美代子の評語も同じことを別の角度からいったものに違いない。作品として『灰燼』に「およそ物語の妙味を認めることは不可能である」として否定的な小堀桂一郎は、それでも現在残されている形でこれを評価するとすれば、ひとえに「主人公山節蔵の特異な人間像に係るものと見るのが妥当であろう」⁷⁾と述べている。

いずれにしろ、構想を新たに「現社会」という「画がくべきアルプの山」に再挑戦しようとしたとき、鷗外自身の「〈否定〉への関心」とも相俟って翻訳中の『ファウスト』、なかんづく〈近代〉の悪魔というべき「Mephistoとかいふ鬼」（『団子坂』）、そして若き日にドイツで観た『ファウスト』劇でつよく印象づけられた「グレイトヘンの事」（『独逸日記』明治19年2月12日）があらためて意識されたとしても不思議はない。節蔵もまた鷗外の「もう一つの魂」であり、血肉を分けた「暗い破滅的な分身」（田中美代子）であろう。

4) 福永武彦『鷗外・漱石・龍之介 意中の文士たち（上）』講談社文芸文庫、1994年、43頁（当該エッセイ「鷗外、その挫折」の初出は「文芸」1962年10月号）。

5) 清水茂「ニヒリスト鷗外の定立と挫折——『灰燼』をめぐる覚え書き」、『日本近代文学』第17集、1972年10月、2頁。

6) 田中美代子「群がる影法師」、ちくま文庫版「森鷗外全集」第3巻『灰燼 かのよう』、1995年「解説」。

7) 小堀桂一郎『森鷗外——文業解題（創作篇）』岩波書店、1982年、83頁。

3. 「つねに否定する霊（精神）」

メフィストという複雑で多面的な存在を考えると、彼自身が自己規定した次のことばは、それじたい謎めいているが、きわめて含蓄が深く参考になる。散歩から連れ帰った「むく犬」が正体をあらわし、「君はいったい何者だ」と問い詰めるファウストに答えたことばである。

私はつねに否定する霊です。

しかもそれには正当な理由がある。なぜなら、生まれたものはすべて、しよせん滅びるしかないものなのです。

それならいっそ、何も生まれぬほうがましでしょう。

そういうわけで、あなた方が罪とか、破壊とか、

要するに悪と呼んでいるいっさいのもの、

それが私の領分なのです。

(V.1338ff.)

誘惑者としての悪魔、恋の取り持ち役、宮廷道化、末期的な帝国に取り入る財政理論家、ヘレナ劇を準備する（醜）の化身にしてヘレナの女執事フォルキアス、皇帝軍最高司令官ファウストを陰で操る参謀、海岸一帯の大規模な干拓・植民事業を取り仕切る現場監督……。『ファウスト』劇においてメフィストは、つぎつぎに「仮面」を取り替えながら様々な「役」をこなしてゆく。ファウストがメフィストを「反対と矛盾の霊（天邪鬼）め！」と呼んだことは述べたが、「つねに否定する霊（精神）」は、それらすべての役に通底する顕著な性格的特徴、シニシズムやニヒリズムの集約的な表現であると思われる。それは「君はあらゆる妨害の総元締だ」（V.6205）や「いったい、お前は悪口がすっかり身につけてしまっ、／何か悪口を言わずには、一言も口がきけないのですか」（V.8992f.）といった相手の台詞に窺われるだけではない。トーマス・マンはメフィストのシニシズムが「デモーニッシュな破壊の意志から発するもの」⁸⁾と喝破しているが、その「破壊の意志」、というより衝動は、メフィストが仮面をかぶる必要のない、彼本来の領分においてひとときわ顛わに露呈する。

「魔女の厨」の場で、主人の自分を見損なった配下の魔女に腹を立てたメフィストは、手にしたはたきの柄で手当たり次第ガラス器や鍋類を叩き割る。「ええ、真つ二つだ。割れろ、割れろ。／ほら、粥がながれる。／コップが割れる。／これでもほんの冗談ごとだぞ」（V.2475ff.）。「ヴァルブルギスの夜」では、ブロッケン山の道案内に呼

8) Th. Mann, a. a. O., S. 607.

んだ鬼火に「悪魔の名において命令だ、真っ直ぐ進め。／さもないと、お前のふらつく命の火を吹き消してしまうぞ」（V.3864f.）と、すごんでいる。

「役」という仮面のもとでは、「否定する霊」は一見鳴りをひそめて見えにくくはあるが、事態はそれだけいっそう隠微で陰湿に進行する。メフィストの周りでつぎつぎに争闘や凶行、破壊や死が出来る。メフィストに目をつけられた町娘マルガレーテは「グレートヒェン」ともてはやされ、誘惑されて淪落の淵に沈む。妹の汚名をそそごとと決闘を挑んだ兄は、メフィストから渡されたファウストの剣に斃れ、母親も、恋人たちの夜の逢引きのためメフィストの用意した「小壇」によって「もう目が覚めない」（V.4571）。「無智なる」ゆえに、身ごもった子を人知れず出産し手にかけてしまう恋人の悲運を、「連れ」の手引きでさっさと逃亡した不実な男は知るはずもない。しかも恋人の苦境を知って救出を迫るファウストに、メフィストは「〈あの娘を救え〉？——いったい、女を破滅の淵に突き落としたのは誰でしたっけ。私でしたか、あなたでしたか」（「曇り日」）と逆襲する。

「第二部」第5幕のメフィストが指揮する、領主ファウストの干拓・植民事業も死と破壊の影のもとに進行する。

昼間はご家来衆が、がやがや大騒ぎをして、
 鍬やシャベルでむやみに土を掘り返すだけなのに、
 夜になるとたくさんの炎が群がって、
 翌朝には、ちゃんと土手ができていました。
 犠牲いけにえになって血を流した人もいたはずです。
 夜、苦しうようにうめく声が聞こえました。

（V.11123ff.）

「あんな水から奪った土地（Wasserboden）など信用がなりません」（V.11137）と、移住に同意しない、隣接する砂丘に古くから住む老夫婦の抵抗に業を煮やしたファウストは、ついに「立ち退かせろ」と命令する。権力者の下命は、メフィストとその手下たち（その名も象徴的な「三人の暴力漢」）によって執行され、結局、菩提樹と礼拝堂をもつ陋屋の放火・焼失と、善良な老夫婦の殺害に終わる。——「交換せよと言ったが、強奪しろとは言わなかった」（V.11371）というファウストの強弁は、メフィストのこぼに輪をかけて空々しく響く。

行為のスケールこそ敵わぬものの、節蔵も「否定する精神」において勝るとも劣らない。「物の両端を敲たたかずには置かない節蔵の思慮は、……表が目映ずると、すぐに

裏を返して見なくてはならない」(拾肆)とすれば、ここにはまさしく「反対と矛盾の靈(天邪鬼)」の面目躍如たるものがある。すでに岡崎義恵が「何物をも肯定せず、何物をも求めない」(漆)節蔵を「絶対の否定者」⁹⁾と呼び、磯貝英夫が「節蔵の徹底的に否定的な認識」¹⁰⁾を指摘するのも故無しとしない。その否定の精神は、一見、因習的なものや権威主義的なものに対して鋭く向けられる。たとえば、今でこそかなり自己を抑えコントロールできるようになって、葬儀が始まり、僧侶が機械的に引導をしたり回向をしたりするのを見ても「恬然として」いられるものの、「一頃こう云う光景に対すると、行きなり飛び出して、坊主頭を片端からなぐって遣りたく思っ、それを我慢するのに骨の折れた事がある」。また一頃は、そういうしかつめらしい挙措を見ると「気が苛々して、それがこうじて肉体上の苦痛になって、目を瞑り耳を塞いでも足りなく思っ、集まっているだけの人に皆顔を見られるのも構わずに、つと席を起って遁げて帰った事もある」(壺)という。俣で弔いに向かう途中も、通りかかった交番で「仔細らしい顔をした白服の巡査が、節蔵の顔を高慢らしく見たが、節蔵はなんとも思わない。こう云う時、気の毒な奴だと思ったのはもうよほど前で、馬鹿奴がと思ったのはそれよりまたずっと前であった」(壺)。いずれにしろ、節蔵の憤怒や軽蔑や無関心の向かう対象が僧侶や巡査なのが偶然でないとするれば、それなりに得心がゆく。

しかし披露されるいくつかのエピソードは、節蔵の「否定する精神」がむしろ氣質的なもので、想像以上にはるかに根深いものであることを窺わせる。そしてそこには、メフィスト流の「デモニーシユな破壊の意志」というか「衝動」も、あきらかに認められる。書生として谷田家の玄關脇の小室に起居を許された当初、節蔵は役所での一日の業を果して帰って、曇りのない満足感をもって晩酌を楽しむ主人の姿に一種のidylle(牧歌)を見て、「珍しい平和の画図に対したように驚きの目を睜^{みは}った」。それが次第に神経に障るようになる。平凡な日常に、なんの疑問も抱かず自足しきって浸っている生活が「一日一日と厭になって来たのである」。「あの晩酌は無智の人の天国である。その天国が詛^{のろ}いたくなって来たのである」(伍)。

「節蔵はこう云う時に、これという動機もなしに、人に喧嘩をし掛けたり、暴行を加えたりした事が、これまで度々ある」。人間関係においても、「交際している間は優しくして、何事にも譲歩し勝である」が、「初め面白く思っった点で厭になることが多く、「絶交する時は、残忍で、何事にも顧慮しない」——こう前置きして語られる椿事には、たしかに度肝を抜かれる思いを禁じえない。中学の時の友達に泉という横笛を

9) 岡崎義恵『鷗外と諦念 下』岩波書店、1950年、83頁。

10) 磯貝英夫『灰燼』【鑑賞】、『鑑賞日本現代文学』①森鷗外 角川書店、1981年、176頁。

たしなむ青年がいたが、節蔵は時々この友を訪ねて笛を吹いて聞かせてもらっていた。ある日、出掛けてみると泉は留守で、机の上に「錦の囊に入れ」て大切にしていた家伝の笛が置いてある。節蔵はいきなりそれを取りあげ、膂力で無理と知ると、囊にはいったまま沓脱の石の上に置き、力任せに庭下駄で踏んだ。

「笛はがちゃりと云って砕けた。丁度そこへ泉は帰って来たが、節蔵は友達を空気の如くに見て、何も云わずに、大股に歩いてその家を出た。泉は青天白日に怪しい夢を見たような心持がして、これも衝っ立ったままで、暫くは茫然としていた」(伍)。

まさに「デモーンニッシュ(悪魔的)」としか言いようのない、残忍で激しい「破壊の意志」である。節蔵自身この感情の激変を癲癇の発作に喩えているが、そこにはどこか病的な異様なものが感じられる。しかしさらに不可解で底知れぬ不気味さを感じさせるのは、この「発作」のあとの、「友達を空気の如くに見て」恬然として恥じぬ態度、人を人とも思わぬ、冷然たる無関心である。本堂の縁側で、近寄ってきた近所の子供が恐怖を覚えて思わず後ずさったのも、その顔にあらわれたこの氷のように冷ややかで非人間的な冷淡さであったろう。そこには、節蔵(メフィスト)の特有な知のあり方が深くかかわっているように思われる。

4. 知力と「醒覚」

メフィストと節蔵が共有する顕著な特性として、傑出した知力ないし知性は、諸家のあいだではほぼ自明の前提になっていると思われる。磯貝英夫は「節蔵に賦与されている強靱無比な知力」、「すべてのイリュージョンを拒絶する知性」¹¹⁾について語り、蒲生芳郎は節蔵の「ほとんど若者とは思にくいほどに冷徹な知性」¹²⁾に言い及んでいる。メフィストについては、すでにG・ヴィトコフスキの古典的な注釈書(ライブツィヒ、1924)が「現世を知り尽くした冷徹なりアリスト」と評している。メフィストを「純粹な知性の権化」と呼び、「メフィストはあらゆる価値を相対化し、〈二つの世界の落し子〉として両義性を免れない、一切の人間的なものの幻想を破壊する」¹³⁾と書いたのは『ファウスト』研究の泰斗 W・ケラーである。因みに〈二つの世界の落し子〉は、「われわれ人間は、自分たちの置かれた状態があるときは神のせい、あるときは悪

11) 磯貝英夫、上掲書、177頁。

12) 蒲生芳郎『森鷗外 その冒険と挫折』春秋社、1974年、227頁以下。

13) Werner Keller: Faust. Eine Tragödie. In: Interpretationen. Goethes Dramen. Hrsg. von Walter Hinderer, Stuttgart (Reclam) 1992, S. 302.

魔のせいにするが、いずれも間違いだ。謎は、二つの世界の落し子であるわれわれ自身のうちにある」（『箴言と省察』ヘッカー、429 番）からの引用である。

指摘されるまでもなく、メフィストの鋭い知性を証しする台詞はほとんど枚挙にいとまがない。「無限」(V.1815)を求めて学問研究によっては叶わず、「いったいおれは何なのだ」と嘆息するファウストに向かって、メフィストはまるで事もなげにこういつてのける。何百万本の髪を植えた^{かつも}仮髪をかぶろうと、何尺もある高下駄を履こうと、「あなたは、結局——あなたですな」(V.1806)。ファウストのガウンを着用して（すなわち仮面を被って）老教授として新入学生にガイダンスするメフィストのことは、逆説的に彼の真意が那邊にあるかを物語っている。「つぎには、何を描いても／形而上学に就かねばならん。／これをやれば、およそ人間の頭脳では達しがたいことを、／その究極の意義において掴むことができる。／頭にはいることにも、はいらんことにも、／ちゃんと立派な術語が出ていて、用を足してくれる」(V.1948ff)。——誘惑しようとする相手が、自分の頭で考えだしたのでは邪魔なのである。それが証拠に、この直後の、「独白」というト書きつきの「そろそろ悪魔の地金を出すか」につづく台詞は、一面の真理を痛烈に衝いて身も蓋もない。

学問だの、研究だのと、いくら駆けずり回ったところでむだなこと。

誰しも、自分の頭で学べることしか学べはせぬ。

いまこの瞬間をつかむ者こそ、

ほんとうの男というものだ。

(V.2015ff.)

この場面には後日譚がある。〈観照的生 *vita contemplativa*〉から〈活動的生 *vita activa*〉へと誘いだそうとしたメフィストの「教育」効果とみるべきか、かつての新入学生（ミニファウスト）は、自信たっぷりの高慢で鼻持ちならない「最新学派のひとり」(V.6687)に「成長」し、再会した、やはりガウン姿の老教授をさんざん愚弄し罵倒する。「われわれが世界の半分を征服していたあいだに、／あんた方はいったい何をしていたのか。……」(V.6782f)。挙句は「古い」を病気呼ばわりし、「人間、三十を超せば、／死んでも同然。／いっそ、さっさとあんたらをぶち殺すのが一等だ」(V.6787ff)。「これでは悪魔も二の句が継げない」と応じているが、それは実はどうやらポーズで、言いたいことだけ言い捨てて颯爽と立ち去ってゆく若い学士を見送ったメフィストの台詞は——「変わり者め、せいぜい得意になって突っ走るがいい！——／どんな馬鹿なことであれ、小利口なことであろうと、／およそ人間が考えるようなことは、とうに誰か

が考えていたとわかったら、／奴もさぞがっかりするだろうよ——」（V.6807ff.）。メフィストのほうが一枚も二枚も上手である。

「グレートヒェン悲劇」からも、「街路」の場から一、二引いてみたい。マルガレーテが親しくしている「隣の女」、「取り持ちや橋渡しにうってつけの女」を利用しようと、見ず知らずのその夫の死亡を証言するようメフィストに迫られて洩るファウストに——

なるほどねえ、聖人君子は違ったものだ。
だがあなた、今度が生まれて初めてですか、
偽証というやつをするのは。
神や世界や、世界の中で動いているものについて、
人間や、人間の頭や胸にうごめいているものについて、
臆面もなく、大胆に、
躍起になって定義を下したりしたことはないんですか。 （V.3040ff.）

「嘘つきな詭弁家め」とファウストは抗弁するが、そのことばには、いまひとつ力がない。凶星を指されたといわぬまでも、思い当たるふしがあるからであろう。

おなじ伝で、変わらぬ愛の誓いはリアリストの悪魔の目には「自己欺瞞」としか見えない。そもそもメフィストは「真心からの愛」など、はなから信じていない。

さてそれから、永遠とこに変わらぬ誠の愛だの、
なにものにも打ち勝つひとすじの情熱とくる——
それもみんなやっぱり真心から出るんでしょな。 （V.3056ff.）

「よさないか、真心からだとも！」と反駁はするが、「それでもわたしのいうのが本当ですよ！」と平然と言いとおす相手に、結局ファウストは屈せざるをえない。「詭弁家」と呼ばれて「さようさ、わたしのほうが少し深い真相を知っているのだからね」と冷然と言い返す相手の言い分にも理なしとしないからであり、その悪魔の声は彼自身の深層の声でもあるだろう。「おまえのいうとおりだとも。おれとしてはそうしておくより仕方がないのだから」（V.3072）。——「悲劇」のはじまりである。そして破局は、周知のように、「なににもあの女が初めてというわけじゃない」（『曇り日』）とぬけぬけと言い放つ「連れ」のシニカルなことばによって告げられる（『良友』相沢謙吉の「人

材を知りてのこひにあらず……。意を決して断て」(『舞姫』)には、このメフィストのことばのこだまが聞きとれるように思う)。

A・トレンデレンブルクはその注釈書(ベルリン, 1922)で、ゲーテがメフィストに付与した特性にサーカズム(Sarkasmus)やイロニー、そして尽きることのないユーモア等を挙げているが、それらの基底にあるのも物事の本質を見とおす透徹した知力である。その鋭い知力は自己分析も怠りなく、「わたしは何でも知っているとは申しませんが、相当なことは心得ています」(V.1582)と謙遜する一方、「なにしろ悪魔は年寄りだ。／悪魔のいうことがわかるには、年をとることですね」(V.6817f.)とうそぶいてもいる。

さて『灰燼』の節蔵であるが、まさに「新入学生」として上京したでの、弱冠18(その過去を回想する時点でも29)の「青年」を海千山千の「年寄り」の悪魔と対比するのはいかにも不合理にみえるかもしれない。しかし両者は「一種強烈な〈Disillusion〉の精神」¹⁴⁾——「すべてのイリュージョンを拒絶する知性」において共通している。節蔵は「学校」には早々に見切りをつけ、「何の講義を聞いても、学科の根柢に形而上学的原則のようなものが黙認してあるのを、常識で見出して、それに皮肉な批評を加えずに置かない」。あらゆる「形而上学」の根柢に潜んでいる恣意的な虚妄が、どうしても目に付いてしまうのである。級友も節蔵と話していると彼の「詞の中に、有り触れた感じやillusionを無造作に打破するような幾句を見出して、……驚いて節蔵の顔を見て、嘲る程の価値もない物を見るような、空虚な目を、自分の顔に注がれているのに気が附いて、気味を悪がって逃げるのである」(拾肆)。

事情はむろん「学校」だけのことにとどまらない。「粗暴なる田舎育」として、厄介になることになった家主の谷田の楽しんでいる「小さい家庭の平和」を当初好意的に受けとめた彼が、やがてそこに「無智の人の天国」を見て詛いたくなる一件についてはすでに触れた。さすがに暴言を吐いたり暴行をはたらくようなことはなかったが、その自制とは裏腹に、節蔵は急速に一切の事物や人間に対する真の関心や情味を失ってゆく。段階的に進んだとされるその「情的生活」の変化は必ずしも明確に示されていないが、その推移の決定的な契機となるのが「醒覚」と呼ばれる事態である。

「節蔵は醒覚したのである。一切の事がこれまでより一層明かに意識に上るようになったのである。

それと同時に節蔵は、自己と他人との心的生活に、大きな懸隔のあるのを知った。否、少くも知ったように思った。それは他人の生活が、兎角肯定的であって、その天

14) 蒲生芳郎, 前掲書, 228頁。

分相応に、大小の別はあっても、何物かを肯定しているのに、自己はそれと同化することが出来ないと思うのである。そして節蔵は他人が何物かを肯定しているのを見る度に、〈迷っているな〉と思う。〈気の毒な奴だな〉と思う。〈馬鹿だ〉と思う」（漆）。

要するに、節蔵の「冷徹な知性」は自他の心的生活に大きな懸隔のあることに目覚めた、というのである。近代的自我の覚醒とも呼応する、その過剰な自意識には、他人のする事なす事がことごとく無意味で無価値にみえてくる。かくて「何物をも求め」ず「あらゆる価値を認めない」ニヒリストには、何かを肯定するということができない（ここでも彼の「否定する精神」は一貫している）。この点、節蔵は「もしおれが満足して、のうのうと安楽椅子に寝そべったら、／その時はおれももうおしまいだ！」（V.1692f）というファウストに似ているように見える。が、ファウストが「永遠なる不平家」（『妄想』）なのは、たえず「何物か」を求めずにはいられないからである（『契約』に誘うメフィストにファウストは、「高きを目指して求めてやまぬ人間の精神が、／君ら風情に理解されたためしがあるか」（V.1676f）と応じている）。いずれにしろ、見えすぎる（と意識する）冷徹な目の持ち主には、凡庸で因習的な何物かに満足して自足している輩が我慢ならないのである。おれはあいつら「家畜の群の凡俗」（『仮面』）とは違う、という軽侮と優越感のないまぜになった屈折した感情である。

ところで、この「醒覚」においてもひとつ特徴的なのは、こうして「肯定即迷妄と観じて、世間の人々が皆馬鹿に見え出してから」、節蔵のこぼれや態度は前よりむしろ「恭しく、優しく（にようわんにく）なった」ことである。求める何物もなく、「ただ自己を隠蔽しようとする」節蔵は「柔和忍辱の仮面」を被ったのである。『普請中』の渡辺参事官が「なり済まして」きた「本当のフィリステル」も、そうした仮面のひとつであろう。いや、「参事官」という役職自体ひとつの「仮面」かもしれない。そして——いかに「柔和忍辱」を装うとも——「仮面」はあくまで仮面であって、生身の肉のもつ温かみを欠いている。自然から豊かな感性と鋭い直感をめぐまれた人（特に女性）が、そこに「気味の悪さ」、ひとを寄せつけない不気味さを感じとるのはそのためである。「ただ奥さんの本能が、節蔵のどこやらに、気味の悪い、冷たい処があるように感じているだけであった」というのは、そのことである。そしてファウストの「連れ」の「気味の悪さ」に、いち早く敏感に感づいていたのがマルガレーテであった。

いつもあなたのおそばにいる方、
わたし、あの方、心しんからいやなのです。
わたし、もの心ついてこのかた、

こんな、胸を刺されるような思いをしたことはありません。
あの方の気味の悪い顔を見るたびに、そういう気持ちになりますの。(V.3471ff)

「なにも、こわがることはない」「^{レナ}性が合わないというやつさ」と、しきりにファウストは宥めているが、「そうするより仕方がない」とはいえ、あきらかにここでも彼は相手と同時に自分を偽っている。とりわけこの対話が、恋人を気遣ってその信仰について問いただそうとする、いわゆる「グレートヒエンの問い」から切り出されていたことは注目すべきである。自明のことだが、メフィストの特性のひとつは、(キリスト教)信仰に対する激しい敵意である。敬虔なマルガレーテは、あの方がそばにいと、どうしても祈ることができなくて、それがつらい、とも訴えている。ファウストも、「とても美しく、結構な」(V.3459) ことばを連ねて、結局は「グレートヒエンの問い」をはぐらかしてしまふ。ハンブルク版『ゲーテ全集』の編者E・トゥルンツは、三者の関係をゲーテ固有の極性^{ポラリテート}の概念から説明して、つぎのように注解している。「ファウストとグレートヒエンとは、互いに引き合う両極である。グレートヒエンとメフィストとは、互いに避けあう対立である。グレートヒエンが初めてこの劇に登場するのは、彼女が教会から出てくるときである。……メフィストとの対立は、すでにこの最初の場面であきらかになる」。節蔵の信仰については詳らかでないが、彼の「気味の悪さ」について、もうひとつ証言を引いておきたい。のちに触れるが、谷田の令嬢、お種さんに付きまとい、頼まれて間に立った節蔵から、そのストーカー行為をやめるよう諫止される「不良少年」相原光太郎の所見である。

「相原は見ないようにして、節蔵の顔を横から覗いている。そして……自分がこの男の冷眼に観察する対象になったと思うと、非常に不快でならない。それに節蔵の顔の化石したような、仮面を被ったような、動揺しない表情が、見れば見る程気味が悪い」(拾参)。

磯貝英夫は、節蔵の並外れた知力と「醒覚」について、「この知力は、たしかに、覚者のものであるよりは、魔的なものに近い。愚者の天国を嘲笑し、いっさいの權威を一蹴する精神の真ん中には、メフィストフェレス的虚無がすわっているようである」¹⁵⁾と述べている。けだし、正鵠を射たものといわなければならない。

5. ニヒリズム、あるいは「無」への醒覚

節蔵の「情的生活」の推移は、すでに示唆したように、じつは「醒覚」をもって完

15) 磯貝英夫、前掲書、179頁。

結したのではない。一切に目覚め、みずから被った仮面によって己れを隠蔽して、世人への嘲笑も軽蔑も秘かな優越感も、すべてをその奥に隠して生きてゆくうちに、気づいてみると節蔵は「我ながら一切の物に対する興味の淡いのと、要望の弱いのに驚かざることを得なかった」（漆）。頭だけが冷え冷えと冴えわたり、「氷の如くに冷かな」無関心に蔽われた節蔵の内面世界は、人間的な感情を完全に抹殺された、まさに「灰燼」という名にふさわしい世界である。かつてのような激しい憎悪や「憤恚」もないかわり、他者に寄せる関心も共感も微塵もない。「無関心にまさる軽蔑はない」ということもできよう。そしてここでも、ファウストの「連れ」を評したマルガレーテのことばが、きわめて的確に事態を言いあらわしている。

わたし、ああいう方と、とても一緒にやっていく気にはなれません。
 家へお見えになるときでも、
 いつも人を馬鹿にしたような顔つきをして。
 それに、どこか怒っているように見えますわ。
 どんなことにも親身な気持になれない人なのでしょう。
 誰ひとり人を愛せない方だってことは、
 ちゃんと顔に書いてありますわ。

(V.3484ff.)

ゲーテの『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』（1796）といえ、^{ビルドゥングスロマーン}「教養小説」の典型とされる、ドイツ近代小説を代表する小説であるが、主人公ヴィルヘルムも決定的な瞬間に一種の「覚醒 Disillusion（ドイツ語では Desillusion）」を体験している。いや、彼の生涯の歩み全体がひとつの「覚醒」の過程であるとみることもできる。18世紀後半の貧しいドイツで、未来の国民演劇の創始者を夢見て演劇界に身を投じたヴィルヘルムは、厳しい現実に触れるなかで次第に幻想から目覚め、最終的に、まさに Illusion そのものである演劇の世界から足を洗って平凡な一市民として生きることを決意する¹⁶⁾。それにしても、この「覚醒」は別して特殊ゲーテ的である。『ドン・キホーテ』について、いみじくも「想像力による現実の誤った解釈と、一連の長い〈失敗に終わった世界との接触〉」¹⁷⁾と述べたのは H・E・ホルトウーゼンであるが、この「覚醒」の先にヴィルヘルムを待ちうけているのは、「憂い顔の騎士」に対するようなく幻滅^{デモンガロキ}

16) 拙著『ゲーテと小説——「ヴィルヘルム・マイスターの修業時代」を読む』郁文堂、1999年、特に第1章第3節「真理への〈覚醒〉」を参照されたい。

17) Hans Egon Holthusen: Was ist abendländisch? In: Kritisches Verstehen, München 1961, S. 322.

desengaño)でもなければ、デンマークの王子の〈憂鬱 melancholy〉でもない。「父のロバを探しに出かけて王国を見つけた」サウルの幸福に比せられる、「真理」の化身ナターリエと結ばれる「ハッピーエンド」である。いわば自己形成としての「覚醒」なのである。節蔵の「醒覚」が、結局、冷たい虚無的な無関心に行き着くしかない——その点で『灰燼』を「裏返しにされた Bildungsroman」という福永の評は当を得ている——とすれば、両者の違いは、いったいどこからくるものだろうか。

節蔵の「醒覚」の背景に、『灰燼』に先立つ『妄想』（明治44年3月、4月）に記された鷗外の「無意識哲学」の読書体験があることはほぼ間違いなく（清水茂は端的に「節蔵の背後にはスチルネルがあった」と言明している）。周知のように、『妄想』は海を見晴らす別荘（「小家」）に端座する「白髪」の「翁」のめぐらす孤独なわびしい想念として綴られる——。

若きエリートとして伯林に遊学し、医学という「自然科学のうちで最も自然科学らしい…… exact な学問」に携わりながら、やがて「自分」は言い知れぬ「心の寂しさ」、癒しがたい「心の飢」に苦しむようになる。「真の生」、人生の意義はあくまで把握しがたく、その心の空虚に促されるように手にしたのがハルトマン（Eduard von Hartmann, 1842-1906）であり、さらにその「無意識哲学」の淵源をさかのぼってスチルネル（Max Stirner, 1806-56）からショオペンハウエル（Arthur Schopenhauer, 1788-1860）へと読み進んだ、という。

「ハルトマンの形而上学では、この世界は出来るだけ善く造られている。しかし有るが好いか無いが好いかと云えば、無いが好い。……それだからと云って、生を否定したって、世界は依然としているから駄目だ」。スチルネルを読むと「あらゆる錯迷を破った跡に自我を残している。世界に恃むに足るものは自我の外には無い。それを先きから先きへと考えると、無政府主義に帰着しなくては已まない。／自分はぞっとした」（改行省略）。そうこうするうちに3年の留学期間は過ぎ、日本に帰る日が来た。「我行李の中に……有るのは、ショオペンハウエル、ハルトマン系の厭世哲学である。現象世界を有るよりは無い方が好いとしている哲学である。進化を認めないではない。しかしそれは無に醒覚せんがための進化である」。

長い引用になったが、このニヒリスティックな哲学に「翁」は総体として「頭を掉った」としながらも、「錯迷打破には強く引き付けられた。Disillusionにはひどく同情した」と認めてもいる。それは、彼もまた Disillusion の果てに「近代の自我の根柢を吹き抜けるあの不吉な影」¹⁸⁾、「虚無」を見てしまった、ということでもあろう。陰鬱な

18) 真木悠介『時間の比較社会学』岩波書店、1981年、301頁。

メフィストの声が聞こえるような気がする。「……生まれたものはすべて、／しょせん滅びるしかないものなのです。／それならいっそ、何も生まれぬほうがましでしょう」（V.1339ff.）。

「過ぎ去った」？それはどういう意味だ。
 もとから何もなかったと同じことじゃないか。
 それなのに、まるでであるかのように、どうどうめぐりをしているのだ。
 だから、それよりおれは「永遠の虚無」のほうが好きなのさ。（V.11600ff.）

この世のすべてはいずれ無になる。ならば、生きることにどんな意味があるのか。「醒覚」の先に待ちうける「無」，「恃むに自我しかない」ニヒリズム——。近代的人間を襲う「不吉な影」の底知れぬ闇の深さである。

ところで意外にも——精緻を極める「鷗外学」の研究によれば——、鷗外の実質的な「無意識哲学」の受容、その「錯迷打破 Disillusion」説への共感は「実はドイツ留学当時のものではなく、……もっぱら『妄想』を書いたときの鷗外のものだった」というのである。「——つまり、『妄想』という作品もまた、言われるような思想の自伝、精神の遍歴であるよりは、むしろ、明治44年当時の、鷗外の心境小説そのものではなかったのか」（傍点原文）¹⁹⁾。

同様に『妄想』を「小説＝物語」、つまりは「虚構」だとする小堀桂一郎は、「一見作者の現実の経歴に即してその内面の閱歴を正直に語つてゐるやうでありながら、そこには實はかなり手の込んだ虚構がはめこまれてゐる」²⁰⁾という。——いかにも、「作者の現実の経歴に即して」いない、という意味では「虚構 Erdichtung」に違いないだろう。だが、ゲーテのいわゆる「詩と真実」の意味で、「詩＝虚構 Dichtung」が高次の「真実」を反映しうることも文学の本来として疑う余地がない。とすれば、「心境小説」『妄想』をとおして、同時期の未完の小説（『灰燼』）とその作者を推論することも許されるであろう。

それではこの時期、「虚構」によってまで鷗外が吐露しようとした「心境」とはいかなるものか、そしてそれは何故だろうか。——ひとつは疑いなく鷗外自身の迫りくる死、「一切ヲ打ち切る重大事件」たる「死」の意識であつたろう。「自分はこのままで人生の下り坂を下って行く。そしてその下り果てた所が死だということを知って居る」。

19) 蒲生芳郎、前掲書、194頁以下参照（引用は196頁）。

20) 小堀桂一郎『森鷗外——日本はまだ普請中だ』ミネルヴァ書房、2013年、420頁。

死じたいが怖いのではない。が、「この自我というものが無くなってしまおう」と思うと「口惜しい、残念だ」と同時に、痛切に心の空虚を感じる」。——「私の死のゆえに私の生はむなしという感覚」(真木悠介²¹⁾)である。前年に計画が発覚し、年初早々、明治天皇暗殺計画の嫌疑で多数の社会主義者・無政府主義者が処刑された「大逆事件」も鷗外を動揺させた一因であろう。

もうひとつは、やはり鷗外自身がさりげなく『妄想』のなかに書き込んでいる。主人の翁は、生と死をめぐる孤独な思念を繰り広げる際に、注目すべき一文から書きだしている。——「主人は時間ということを考える。生ということを考える。死ということを考える」。『時間の比較社会学』を「〈死の恐怖〉および〈生の虚無〉」の節から始めた真木は、「私の死のゆえに私の生はむなし」という感覚の根底には、西欧近代に固有な時間意識の存在があるという。いわく、直線的に流れ過ぎて(直進性)、還ることのない(不可逆性)「時間」という意識である。明治5年に太陽暦とともに「近代の時間」を採用してほぼ40年、明治の第二世代として「近代化」の名のもとに、公私とも、ファウストさながら「ただもう世界を駆け抜けてきた」(V.11433)果てに、気づいてみると、かけがえのない一度限りのはずの「生」が舞台上で役者の勤める「役」にすぎないように感じられてくる。「この役が即ち生だとは考えられない」。——符節を合わせたように、同じ明治44年、漱石は講演で「現代日本の開化」の「外発性」を指摘し、このような「皮相上滑り」の「開化の影響を受ける国民はどこかに空虚の感がなければなりません」と述べている。「痛切に心の空虚を感じる」と書いた鷗外との見事なまでの符合に驚かざるをえない。

社会学者大澤真幸のこゝばによれば、「人が自分の人生を意味あるものと実感するには、人生を超える時間の流れと結びつく必要がある」²²⁾という。それを保証していたのが、かつての西欧人にとっての「神」や「自然」や、地縁・血縁に基づく「ゲマインシャフト共同社会」(その最小単位としての「家」)である。それら「生」を意味づけていた「永遠なるもの」「無限なるもの」との紐帯を「近代化」、とりわけその新しい「時間」は断ち切ってしまった。「神」は「死んだ」とされ、「自然」は征服と利用(内実は「収奪」)の対象に貶められ、「ゲマインシャフト共同社会」に取って代わる利潤追求を旨とする「ゲゼルシャフト利益社会」は、ばらばらな孤独な個人を生みだした。「翁」(=鷗外)が「時間ということを考える」と書いたとき、そこでいう「時間」はおそらくこの新しい時間(「時間」は明治の翻訳語の一つ)であり、この時期鷗外は明確に「近代の時間」の両義性に想到している。独逸

21) 真木悠介、前掲書、3頁。

22) 「ナショナリズムの迷宮——すれ違う日韓(下)」、『朝日新聞』2019年11月24日参照。

語の *Streber*——つまりはファウストを特徴づける〈*streben*〉——が帯びている「嘲意」について言及する『当流比較言語学』の認識とも、それは正確に呼応している。

「赤く黒く塗られている顔をいつか洗って、一寸舞台から降りて、静かに自分というものを考えてみたい」。そう望みながら、結局、鷗外は最期まで「舞台から降り」はしなかったが、「遺言書」の一見意表を突く「余ハ岩見人森林太郎トシテ死セント欲ス」は、この願望の簡明直截な表現であると思われる——高橋義孝がその特異な鷗外論において、「ニヒリスト鷗外」の立論の有力な根拠のひとつにしたのも、「遺言書」のこの一節であった。いわく「個人的な資質として異常な悟性の力を授かり、「自然科学の洗礼を受け、自然科学を最も未来に富むものとする（『妄想』）人間であった」鷗外、その「論理的に煮つめて行くという能力、異常な理知のエネルギー、これこそ彼を比類のないニヒリストたらしめたものであった」。「ニヒリスト鷗外がこの遺言の書き手だったこともいうまでもあるまい。無常の世に、死してのちの一切の事柄はむろん（馬鹿馬鹿しい）のにきまっている。裸で生れて、裸で死ぬのは、陸軍軍医総監森林太郎でもなければ、帝室博物館総長兼図書頭正三位森林太郎でもない。それはただの森林太郎だろうから」²³⁾。

たしかに、死を前にして己れの生きてきた「生」を畢竟するに「無」と裁定する意識は、やはりニヒリズムといわなければならない。そして節蔵が鷗外のまぎれもないアルター・エゴ、「暗い破滅的な分身」（田中美代子）であるなら、「無」へと醒覚する彼もまた、当然、作者と同じ意識を生きていなければならない。

6. 「鐘樓の悪魔」と「十三時」

回想する現在（明治 44 年）の節蔵の文筆活動については作中に具体的記述はないが、11 年前、上京して数カ月後に 18 歳の節蔵が試みた処女作「新聞国」は作中作として読むことができる。たまたま手にした「ポオの物」に触発され、「自分の行くべき道をこの案内者が示してくれるよう」に感じて書き記したものだ。筋書きの域をあまり出ないこの「毒々しい諷刺」の中身についてはひとまず措いて、注目に値するのは、節蔵が「ポオの集中にある『鐘樓における悪魔』から強い印象を受けて」下敷きにしたと回想していることである。『灰燼』の、当該の「部分を書いてみたと推定される頃」（正確には大正元年 9 月）²⁴⁾ 鷗外自身が『鐘樓の悪魔 *The Devil in the Belfry*』（以下、定訳に従い『鐘樓の悪魔』とする）を翻訳しているからである（鷗外がテク

23) 高橋義孝『森鷗外』（一時間文庫）、新潮社、1954年、引用は137、156および162頁。

24) 小堀桂一郎『森鷗外——文業解題（翻訳篇）』岩波書店、1982年、134頁以下参照。

ストに使ったのはドイツ語訳 *Der Teufel im Glockenstuhl*。同年10月、「趣味」に発表された『十三時』がそれである²⁵⁾。凶らずも、ここで、回想する節蔵と未完の長編を執筆する鷗外とがほぼ完全に重なり合う。しかし、もちろん、さらに重要なのは、二人を惹きつけたそこで扱われる主題のほうである。

どの本街道からも離れた谷あいの辺鄙な町(というより、その規模から考えて「村」)が物語の舞台である。周囲をなだらかな丘に囲まれたこの平坦な円形の町には、外縁に沿って、60軒の小さな家が中央広場に面して立っている。まったく同じ造りのどの家にも「小さな前庭があり、そこには環状の道と、円い日時計がひとつ据えつけられ、そしてキャベツが24株植えてある」。どの家からも等距離の、広場の中央に立つ鐘楼に見える大時計と鐘は、太古以来、けっして誤ることのない正しい時を報じている。住民たちはみな、絶えずこの大時計を眺め、「我らは我らの時計とキャベツに永遠の忠誠を誓うべし」という訓えをモットーに、古来の善き慣習を守って規則正しい生活を送っている――。

すでにほぼ自明のように、この町全体が(そこに暮らす住民も含めて)時計ないし時間のメタファーである。もっとも、その「けっして誤ることのない」時計は、近代都市の市庁舎にシンボリックに建設された時計塔の機械仕掛けの時計ではない。日時計とキャベツを基準にする、いわば「キャベツ時間」とでもいうべきその時計が計測する時間は、中世史家J・ル・ゴフの「〈鐘〉の時間と〈時計〉の時間」²⁶⁾の比喩でいえば、あきらかに近代以前の「〈鐘〉の時間」に属するものである。ゴフを踏まえて今村仁司はつぎのように述べている。

「教会の〈鐘〉は、農村的・自然的な、そして宗教的な時間の表現である。〈一日〉が朝・昼・晩に分割されていれば十分であった。固定的な生活様式が持続するかぎり、〈鐘〉で時を表わしていけばよい。しかし時代はとうとうとして変動つねなき状態に変わりつつあった。鐘によるおおざっぱな時間区分ではやっていられない時代が到来した。商人の時間と手工業者の時間は、少しずつ教会の時間を掘りくずしていく。時計が鐘に勝利する時は近い」²⁷⁾。

25) 小論での引用は、『十三時』については「諸国物語 下」(『鷗外選集』第15巻、岩波書店、1980年)から、ポオ『鐘楼の悪魔』は谷崎精二訳(『ポオ小説全集』第4巻「探美小説」春秋社、1963年)を基本にし、野崎孝訳(『ポオ全集』第1巻、東京創元新社、1963年)を参看したが、いずれも文脈を考慮し適宜変更した。

26) ジャック・ル・ゴフ(加納修訳)『もうひとつの中世のために――西洋における時間、労働、そして文化』白水社、2006年、第一部第2章「中世における教会の時間と商人の時間」を参照。

27) 今村仁司『近代の思想構造――世界像・時間意識・労働』人文書院、1998年、165頁。

ドールン・ファン・ロッスムは、時間計測の歴史の観点から、「鐘」の時間と「時計」の時間のあいだには様々な移行形態のあったことを教えてくれる。

「市の時計と時計の鐘はたいてい市塔に設置され、市鐘もそこに懸かっていた。時計の打鐘装置は、時間合図にできるだけ長い到達距離を与えるため、もしくは別の鐘の経費を節約するために、しばしば市鐘と結びつけられた。……市塔と市鐘はヨーロッパではどこでも、共同体のアイデンティティの担い手だったのである」²⁸⁾。

『鐘楼の悪魔』に話を戻すと、町には「丘の向うからは確なものがかかるはずはない」という言い伝えがあって、土地の人で丘を越えて外へ出た人はまだ一人もない。「こんな結構な、泰平無事な町に非常な災難が出来ようとは、実に誰も予期してゐなかつたのである」。

その丘の天辺に、ある日、正午5分前、怪しい人影が現れた。かつて町で見たことのない「馬鹿げた風体の男」である。この「怪しい曲者」は踊るような身振りで丘を駆け降りてくると、正午30秒前、「羽が生えて飛ぶように、町会議事堂の塔の上に駆け登つた」。そして、時刻を合わせようと固唾を呑んで見守る住民たちを尻目に、あっという間に鐘楼の番人を手込めにすると、「その職でもないのに」どうやら大時計をいじくっている。やがて、鐘が正午の時報を打ち始めた。「一つ」と時計が云つた。「一つ」と住民たちが鸚鵡返しに云つた。「二つ、三つ、四つ」と鐘は鳴りつづけ、「二つ、三つ、四つ」と皆はくり返す。ついに「十二」と鐘が鳴って、「十二」と皆はホツとしたような様子で応じた——。「然るに大時計はまだこれでは鳴りやめない。〈十三〉と大時計は云つた」。この後に起こった恐ろしい出来事は、およそ筆舌に尽くしがたい。「兎に角、町全体が大騒乱の渦中に陥つたと云ふより外はない」。

小篇の主題は、再びル・ゴフの比喩によれば、「鐘」の時間から「時計」の時間への（日本でなら、江戸の不定時法から明治の定時法への）時間計測システムの（革命的な）変革及びそれによる衝撃と混乱である（正午の時報のあと、続いてすぐ「十三時」が告げられるのは、異なる二つのシステム間のズレ〔時差〕の解消のためかもしれない）。英文学者でもある（ポオも訳している）丸谷オーは『たった一人の反乱』（講談社、1972）において、元大学教授の野々宮先生に知人の受賞記念パーティで、賞品の時計にちなむ、蘊蓄を傾けた名祝辞を述べさせているが、つぎに引くくんだりなどは明らかに『鐘楼の悪魔』を念頭に置いている。

28) ゲルハルト・ドールン・ファン・ロッスム（藤田幸一郎ほか訳）『時間の歴史——近代の時間秩序の誕生』大月書店、1999年、186頁。

「実用品としての時計とは何か？言うまでもなく、市民にとっての時計であります。労働者は、労働時間売ることによって報酬を得、生計を立てる。とすれば、当然、労働のはじまりと終りとを決め、それを告げる仕掛けがなければなりません。田園における少人数の労働ならば、太陽によっておおよその見当をつける程度で差支えない。しかし、大工場の労働となりますと、そのようなことは許されなくなり、時計がぜひとも必要になる。……これこそは近代市民社会における時計の意味にはかならない。それは労働時間を計り、さらには金利を計る。これを逆に言えば、市民社会とはすなわち時計によって運営される社会ということになりましょう。……それゆえ、もし将来、都市の時計塔を占拠して大時計を狂わせつづける者が出るならば、それは市民社会に対する反逆、つまり革命の意図を表明する、まことに好個の冗談となるであります」。

本題に返ると、鷗外が『十三時』を発表し「新聞国」を構想・執筆していた（大正元年10月）頃（その前年に『妄想』が書かれ『ファウスト』が集中的に翻訳される）、おそらく鷗外は「近代市民社会における時計の意味」に決定的に開眼したと思われる。「労働時間を計り、金利を計る」近代の時計によって計られる人生という時には、当然「はじまりと終り」がある。『ファウスト第二部』第5幕では「海を支配し、自然の主になろうとする」領主ファウストの悲劇が描かれるが、すでに齢百歳に近い彼は、ひどく不安げで絶えず苛立っている。近代の直線的に過ぎゆく還ることのない時間は、刻一刻と「老いさせる」、つまり「死」に向かってゆく時間でもある。しかも、近くの砂丘に満ち足りて住む敬虔な老夫婦の、祈りの「時刻」を告げる礼拝堂の「鐘」は、いやでもそのことを思いださせずにはおかない。「あの鐘の響きを聞き、菩提樹の香りを嗅ぐと、／教会が墓穴にでも入ったような気がする」（V.11235f.）。結局、「死」を兄弟にもつ「灰色の女たち」のひとり、忍び寄る「憂い」の強大な力を認めようとしないファウストは、「憂い」に息を吹きかけられ、「盲目」になる。

18歳の節蔵がポオをどう読み、何を受け取ったかは、実のところあまりはっきりしない。しかし、すでに「醒覚」していた節蔵の関心と共感が「怪しい曲者」、他所から来た「外道」——「悪魔」ないし（今なら）「トリックスター」に向けられていたことは容易に想像できる。節蔵は、「この国の人民は新聞の種を作る人と、その種を拾って書く人と、その書いたものを買って読む人との三種類に区別することが出来る」（拾捌）と書きだした作中作の紙幅の大半を「人民の類別」に費やししながら、本当に「自分が書こうと思った事」は「新聞国の政変である」と告白する。すなわち「有力な政治家が出て、Coup d'étatのような手段で新聞を廃せようとする」、それによって惹起される「周章狼狽の様子は随分面白く書けそう」だというのだ。実際には、想像をめぐらす

うち「いつの間にかぐっすり寝てしまった」節蔵によって肝心の「政変」は描かれず、『灰燼』じたいも「新聞国」とともにそこで中断されるのだが、この処女作はどうやらポオの『鐘楼の悪魔』を「新聞の外に何物をも有せない」架空の国に寓意的に変換したもののように思われる。そもそも Zeitung（新聞）という語は〈time and tide wait for no man〉（歲月人を待たず）の格言で知られる tide に由来するが、この語は「潮の干満、潮汐」を表わし、古くは「時分」や「季節」をも意味した、つまりは Zeit（時間）の語源でもある。そして洋の東西を問わず、古来「時を治めることは社会を治めること」²⁹⁾ という真理を思うなら、海を支配しようとする領主ファウストの干拓事業は、永遠にくり返す潮の干満の「不生産性」に対する彼の憤懣と反逆が始まりだった、という事実は意味深長である。それは、いわば絶えず進歩と成長を目指す「時計の時間」による自然に対する反逆、〈Coup d'état〉である。

盲目で意気阻喪するどころか、いよいよ野心をたぎらせるファウストは、耳に心地よい鋤の音に事業の完成を夢想し、文字どおり〈Coup d'état〉が画策されているのにも気づかない。

宮殿を出て手狭な家にお移りだ。

馬鹿なことだが、とどのつまりはこれが落ちさ。 (V.11529ff.)

古往今来、ニヒリストの常套句といってよいだろう。メフィストが手下の死霊たちに命じてさせていたのは「掘割り」ならぬ「墓掘り」だった。それではファウストもまた、トルストイの美しい民話『人間にはどれほどの土地がいるか』の語るように、「長方形の穴をひとつ」得ただけだったのか。——この直後、ファウストは壮大な理想のビジョンを夢見て、決定的な「賭け」の文句を口にす。「おれの地上の生の痕跡は、／永劫を経ても滅びはしない」(V.11583f.)。メフィストの言いぐさでは、「どうじたばたしようと、お前たち人間はたすからない。／四大はおれたちとぐるになっている。／何をたつて、とどのつまりはいっさい破滅さ」(V.11548ff.)。いったいどちらの主張に分があるだろうか。「永劫」たるべきファウストの地上の生の証しを呑み込もうと

29) 福井憲彦『時間と習俗の社会史』新曜社、1986年、第I部「歴史のなかの時間」を参照。また論考「時計が人間を支配するとき」(福井憲彦『鏡としての歴史』日本エディタースクール出版部、1990年所収)は、19世紀、イギリス人がキリスト教布教と近代化を進めるに際し、最大の障害になった(基本的に循環的時間による)現地のメリナ暦を解体して、グレゴリオ暦に置換することから始めたマダガスカル的事例を挙げて、「時間を支配することは、つまり社会を支配することなのである」所以を具体的に説いている。

「水の悪魔ポセイドン」(地震の神でもある)が虎視眈々と窺い、傍らでは着々と彼の「墓穴」が掘りあがっている。この現実を前にしては、勝敗の帰趨は自明と思われる。現に、斃れたファウストを尻目にメフィストは勝ち誇ったように言い放つ。

どんな快樂にも飽き足らず、どんな幸福にも満足せずに、
とっかえひっかえ、いろいろなものを追い求めた男だった。
ところが、最後の、つまらない、空っぽの瞬間を、
哀れにも引き留めようとした。
どうにも手ごわい相手だったが、
時間の力には勝てない。このとおり、砂の上に老いぼれ姿をさらしている。
時計はとまった—— (V.11587ff.)

ここでの「時間」が、機械仕掛けの「時計」に象徴される近代の過ぎゆく時間なの
はいうまでもない。そしてファウストが引き留めようとした「美しい」瞬間とは、盲
人の幻想——皮肉にも、実は己れの「墓堀り」という「つまらない、空っぽの瞬間」
であった。それでは(周知のように)幻想・錯迷に囚われているファウストが救われ、
あらゆるイリュージョンとは無縁の、最初から「醒覚」しているメフィストが敗北す
るのは何故なのか。また、〈Coup d'etat〉を企む「悪魔」に惹かれる虚無的な節蔵には
どのような最期がありうるだろうか。

7. 「われらを引きて昇らしむ」? —— 愛の不在とメフィストの挫折

ファウストの最期とその事業の完成を目前に、「四大はおれたちとぐるになっている」
と述べたメフィストの台詞には偽りがある。「偽り」といわぬまでも、半面の真理に過
ぎない——あるいは、ことさら残りの半面を隠している。ファウストとの初対面とな
る最初の「書齋」の場においてすでに、彼は「否定する霊」として、「永遠の創造」(V.11598)
に対するむき出しの反感と敵意を語っていた。

無に対立する或る物、
つまり、この不細工な世界ですが、
こいつが、いままでずいぶん手を尽くしたが、
どうにも始末におえない。
津波、嵐、地震、火事——
なんで攻めても、あとにはやっぱり陸と海とが平気で残っている。

それから動物とか人間とかいういまましい代物だが、
これがまたなんとも手に負えない。
いままでどれだけ葬ったかわからない。
ところが、いつもまた生きのいい新鮮な血がめぐりだす。
それがいつまでも続いてゆく。考えると気が狂いそうです。
空気からも、水からも、土からも、
無数の芽が萌えだしてくる。

(V.1363ff.)

古代哲学において自然界を構成すると考えられた「四大」（すなわち地、水、火、風）は、メフィストと結託してその破壊的な力をふるうわけではない。一見「破壊的」な力が同時に創造的な作用をも秘めており、宇宙の創造と破壊、生成と消滅をつかさどる循環的な二元のコスミックな力によって世界は維持されている。メフィストはその力の破壊的な側面を体現ないし代理するに過ぎない。ファウストから「君はいったい何者だ」と訊かれてまず彼が、「つねに悪を欲して、しかもつねに善をおこなう／あの力の一部です」（V.1335f.）と答えているのは、分をわきまえ、己れの役回りを自覚した、きわめて的確な返答といわなければならない。トーマス・マンがメフィストを「宇宙的なニヒリスト」（『ゲーテの『ファウスト』について』）と呼ぶのも、同じコンテキストで考えてよいであろう。

ところで、S・フロイト（1856-1939）は晩年の論文「文化のなかの居心地悪さ」（1930）のある脚注で、「ゲーテはメフィストフェレスにおいて、悪の原理と破壊欲動とを同一視しているが、実に説得力がある」と述べてメフィストの先の台詞を引いたうえで、こう書いている。「悪魔自身、みずからの敵として挙げているのは聖なるものや善なるものではなくて、自然がもつ生殖力や生命を増殖させる力、要するにエロスなのである」³⁰⁾。晩年のフロイトにとって「エロス」とは「性欲動という枠をはるかに越え、生物にあまねく存在し、その成長を促し、より大きな統一と維持、発展と躍動とに導き、死を遠ざけるものとされている（つまり愛という概念がカバーする全領域を指して使用されているものと考えてもよいだろう）」³¹⁾という。はたして（『愛の人』でもある）ファウストは、メフィストの苦情に対して適切にも、「そうやって君は、永遠に活動す

30) Sigmund Freud: Das Unbehagen in der Kultur. Gesammelte Werke, chronologisch geordnet, Bd, 14, London 1948, S. 480.

31) 福原泰平「エロス／タナトス」、今村仁司編『現代思想を読む事典』講談社現代新書、1988年、95頁。

る／恵みゆたかな創造の偉力^{まゐり}に対して、／むなしく悪意をこめて固めた／つめたい悪魔のこぼしを揮っているのだな」(V.1379ff)と応えている。自然の永遠に休みなく創造する力こそ「エロス」の働きであるとすれば、その人間的な発現形態としての「愛」の問題も、当然、問われなければならない。

メフィストについては、「誰ひとり人を愛せない方だってことは、／ちゃんと顔に書いてありますわ」という、マルガレーテのことばに尽きよう。メフィストにあるのはただの「性欲動」で、「愛」は彼の理解の範囲外である。「森と洞窟」の場、大自然のふところ深くに抱かれて自然のみなぎる生命力との一体感に浸るファウストのもとに押しかけ、その「超現世的快樂」を揶揄するメフィストのことば——「恍惚として天地を抱きしめ、／おのれを神かとばかりに膨れあがり、／想像のおもむくまま大地をかきまわし、／神による創造の六日間を残らず胸に感じとり、／昂然として、何やらわけのわからぬものを味わい、／たちまち、歓びに陶然として、みなぎる愛を注いで万物と一体になる」(V.3284ff)。そのことばの実に巧みな措辞「wonniglich umfassen (恍惚として抱きしめ)／aufschwellen lassen (膨れあがり)／durchwühlen (かきまわし)／genießen (味わい)／liebewonniglich überfließen (歓びに陶然として……みなぎる愛を注ぎ)」はすべて、A・シェーネの「注釈」(フランクフルト、1999)によれば、性行為の隠喩であり、長広舌を締めくくる「卑猥な身振り」は一切をその性行為に還元する。否定の霊のメフィストが、愛と情欲の別を認めえないのは当然である。

「第二部」第2幕「実験室」の場、喪心したファウストの蘇生のため、ギリシア行きを提案されて二の足を踏むメフィストに、ホムンクルスが誘いをかける——「あなたはまんざら野暮な方じゃない。／テッサリアの魔女といえば、／おわかりでしょう」。と、即座に「(欲情もあらわに) テッサリアの魔女! ようし、それこそは／長年気にかけていた女たちだ。／毎晩毎夜のおつとめとなると、／あまりぞっとしないだろうが、／まあ、訪ねて、試してみるぶんには——」(V.6979ff)。「テッサリアの魔女」は、古来ことのほか淫蕩でとおっていた。

さすがに、18かそらの「田舎育」の若者を、「性」についてもきわめて老獪なメフィストになぞらえようというのではない。しかし、「醒覚」した節蔵が愛の幻想とも早々と切れていることは十分に銘記する必要がある。節蔵と谷田の一人娘のお種さんとのあいだにかつて何かあったとすれば、その愛と無縁な「性」にかかわるとしか思われない。そして、谷田の葬儀の場で、ほとんど9年ぶりに実現した、異常なまでの緊迫感をもって描きだされる再会の情景を読むなら、二人のあいだに何もなかったと考えるほうがむしろ不自然だろう。

「お種さんも……その目を節蔵に移したが、忽ち非常な感動を受けたものらしく、血の気の少かった今までの顔が、一層蒼くなって、唇まで色を失って、全身が震慄するのを、咄嗟の間に、出来るだけの努力を意志に加えて、強いて抑制したらしかった。そして目を大きく睜^{みは}って、節蔵の顔をじっと見て、元の席に据わることを忘れたように立っている。みな子は母親がぶるぶるとした時、……驚いて母の顔を見て、本能的に母の視線を辿って、同じように大きく目を睜^{みは}って、これも節蔵を見ている。節蔵はお種さんの燃えるような怒の目と、……娘の驚の目とに、一齊に見られながら、膝を衝いたままに親子の女と顔を見合せていたが、自分の顔の筋肉は些^{いささか}の顫動もしなかった」（壺）。

二人の男女のあいだに、あつてしかるべき懐かしさや親愛の感情は微塵もない。それどころか、お種さんの「燃えるような怒の目」と、表情ひとつ変えない節蔵の冷淡なまでの非情との、きわだった対照が印象的である。福永や蒲生をはじめ、多くの評家が二人のあいだに「性的な関係」を推測するのはいわば必然である。しかも、この日喪主を務める婿養子の次郎との結婚後間もなく——節蔵は、お種の婿取りの話が持ちあがると、その結婚を待たず早々に谷田家を出る——、少し月足らずで生まれたという「九つか十ばかりの、髪をお下^{さげ}にした娘」についての記述は、あたかも彼女が節蔵の胤であることを強く示唆しようとするかのようである。

節蔵が書生として谷田家に入ったとき、華族女学校に通い始めたばかりのお種さんは14だった。この年齢については、「グレトヘン」のこだまが微かに感じられる。「魔女の厨」の楽で「若返って」出た「街」で、最初に出会った町娘に熱を上げる「大事な友だち」を焦らすように抑えにかかるメフィストに、「でも年齢は十四を越しているだろう」（V.2627）。悪魔顔負けの物言いであるが、当時14歳未満では一人前の女とみなされず、それとの交渉（性交）は法的に禁じられていた。さらにこの場（「街」）は、『ファウスト』を極性的概念から解釈するE・トゥルンツによれば、「男性的なるもの」と「女性的なるもの」という二つの原理が初めて交差する重要な場面でもある。

さて、すぐに夏休みになって、お種さんが玄関わきの小室を訪れることが重なるうちに、彼女も「次第に心安くなって」くる。読書している節蔵の傍らで、独りで遊んだり、時には思い切った悪戯もする。注目に値するのは、その様子を「横目で」窺う節蔵の視線である。遊びに全神経を傾注している風の少女の「ただすうすと云う、小さい息の音」、「細い、透き通るような指」、その「小さい指のしなやかな、弾力のある運動」（参）、そして鞆を衝く「お種さんのしなやかな姿」（肆）。すべては外面ないし表面をなめるように滑ってゆくばかりで、内面にまで入りこむことはない。蒲生芳

郎も指摘する、無邪気で可憐な14歳の少女に向けられた「肉感的で、しかもどこか非情な視線」³²⁾である。「一体何物にも深い興味を持たない」節蔵は、いつも情熱ならぬ「好奇心のために動くことが多い」(拾壺)とされるが、ここでも観察をやめることはできぬものの、「そのくせ彼は女を尊敬してはいない」(拾柴)。ある時「柔和忍辱の仮面」が落ちて、同じような状況で『青年』の純一が「無智なる可憐なるお雪さん」に対して「ある破碎し易い物」として「これに……加えなくてはならないように感じた」〈保護〉が、お種さんにははたらかなかったとしても不思議ではない。

学期が再開して間もなく、17歳の「美少年」相原光太郎が谷田の令嬢に付きまとう、という事件が持ちあがる。それをやめさせてくれるよう、節蔵は交渉を依頼されるのだが、「事件」そのものより、ここには別の微妙な問題が絡んでいる。光太郎は中学では「お光さんという名で知れ渡っていて」「赤いりぼんを掛けた娘であった」。「変生男子」といわれているが、男に変わるにあたって「大学の附属病院へ往って、身体検査をして貰った」というから、医学的という「インターセックス」なのであろう。が、肝要なのは、ここでも節蔵の反応のほうである。彼が交渉を引き受けるのは、「そう云う人間がどんな顔をしているか、どんな態度をしているか見たいと云う好奇心を起した」(拾壺)ためである。そして、対面した光太郎に向ける節蔵の視線は、やはりきわめて特徴的である。

「並んで歩いている節蔵の目には、相原の薄赤い耳が見える。その耳を囲んでいる頬と頸とが、お白いを塗っているかと思う程白く、それが生際を短く刈った頭の青み掛かった地に移り行っている。顔から頸へ掛けての肌に、一種の軟みがある。……節蔵はこの頭を束髪にしたら、好くある型の女学生の貌になると思った」(拾參)。お種さんを観察するのと同じ目で光太郎を見ている——あるいは、その逆かもしれない。いずれにしろ、光太郎が「気味が悪い」と感じた、対象に向けられるその目は「愛」ではなく「好奇」であり、しかもそこには、ある種の性的指向のけいも濃厚に感じられる。『青年』において、純一に対するメフィストの役回りを一部引き受ける大村莊之助の感懐が想起される。

「純一の笑う顔を見る度に、なんとという可哀い目付きをする男だろうと、大村は思う。それと同時に、この時ふと同性の愛ということが頭に浮んだ。人の心には底の知れない暗黒の堺がある。……自分はhomosexuel^{オモセクシユエル}ではない積りだが、尋常の人間にも、心のどこかにそんな萌芽が潜んでいるのではあるまいかということが、一寸頭に浮んだ」(二十一)。

32) 蒲生芳郎、前掲書、244頁。

わざわざ大村を引き出すまでもないかもしれない。当のメフィスト自身がはっきりと同じ指向を語っている。しかも、それがメフィストの蹉跎に（とは、つまりファウストの「救い」に）微妙にかかわっている。「埋葬」の場——この場全体がかなり茶番劇風に描かれているが——、手下の悪魔たちと共にファウストの「靈魂」が飛び出すのを取り押さえようと見張っていたメフィストは、不意に「愛」の薔薇を撒きながら舞い降りてくる「男の子とも女の子ともつかない」（V.11687）天使たちに性的刺激を覚え、肝心の魂を見失う。

お前たちはおれを呪われた悪霊とそしるが、
ほんとうの魔法使いはお前たちのほうだ。
なにしろ男でも女でも迷わすんだからな。——
なんといいまいましい色仕掛けだ。
これが愛の火というやつかい。
おれはもう体じゅうが燃え立って、
頸筋に薔薇の炎が燃えついているのも感じないくらいだ。——
いつまでもふわふわ浮かんでいないで、そろそろ降りてこいよ。
その可愛い手足をもうちょっと俗っぽく動かしてみせてくれ。
まったくの話、その真面目くさったところがまたいいね。
だがね、一度でいいからお前たちの笑顔が見たいんだ。
それが見られたら、おれは天にも昇る心地だろう。 (V.11780ff.)

最後にメフィストが口にするのは、いわば悪魔流の「とどまれ、おまえはじつに美しい！」である。これに続く台詞の結びの2行はさらに露骨である。「ほほう、背を向けたね——うしろ姿が見られるて！／小僧ども、なんともまったく旨そうだなあ！」（V.11799f.）。——この時点ですでに勝敗は決している。気がつくと「天使ら、ファウストの不死なるものを運んで空へ昇ってゆく」（V.11817f.ト書き）。「いい齢をして、まんまとやられた。／身から出た錆とはいえ、どうにもひどい幕切れだ。／とんでもないへまをやらかしたぞ。／たいへんな元手をかけて、それをすっかり棒に振ってしまった」（V.11834f.）——。斃れたファウストに向かって吐いたばかりの「最後の、つまらない、空っぽの瞬間を、／哀れにも引き留めようとした」を、我が身において実演させている。メフィストの敗北である。

福永武彦は、『灰燼』が『青年』の立ち至らなかった「暗黒の堺」、人間存在の「暗黒面」をも描こうとする以上、話は当然 homosexual の問題にも及んだはずである、としてこう述べている。「お種さんが婿養子を取ることにきまって彼女から覚悟を問われた時に、節蔵が何か不徳義なことを、行為で示したか口先で言ったか、とにかく彼の冷やかな仮面がその時落ちた、ということも考えられるのではないか。そしてそこに必ずや相原光太郎との同性愛が絡んで来ていると私は想像する³³⁾。大胆な推測である。が、「同性愛」——「少年愛」というべきか（主人公は、奇しくも節蔵と同じ 18 歳）——をモチーフに、美しくも哀しい物語『草の花』（新潮社、1954）を書いた作家のことばとして、信憑性は高いと思われる。

ただ、二人の主人公の違いもまた大きいといわなければならない。節蔵には、美少年の後輩に思いを寄せる旧制高校生の苦しいまでの観念の純潔はもとより、「大事な、かけがいのない宝」を攫われて己れの失態をみずから嗤うメフィストの（限りなくブラックに近い）ユーモアもない。そもそも、なにごとにも幻想をもたないニヒリストの醒めた知性には、「好奇」のみあって「愛」がない。「そういう邪悪な知性を真に相対化するものももしあるとすれば、それは……お種さん以外にはない³⁴⁾」とは、中絶した小説についての磯貝英夫の推論であるが、冒頭の再会の時間を超えて進む小説の展開は想像しにくい。『灰燼』の結末は、白々と広がる荒涼とした虚無の世界以外ありうるだろうか。愛が不在のところ、はたして「救い」は可能だろうか——。

周知のように、『ファウスト』全篇の結びは「永遠にして女性的なるもの、／われらを引きて昇らしむ」（V.12110f.）である。小説が未完に終わっている以上、断定はできないが、「おのれの過ちにもそれと気づかず」（V.12067）蹂躪された「無智なる」お種さんが、「かつてグレートヒェンと呼ばれし贖罪の女の一人」のように「永遠にして女性的なるもの」に迎えられ、「上からの愛」の列に連なることは、まして不実な男の代願・救済者として立ち現れることなど、どう考えてもありそうにない。そしてそこには、当然ゲーテと鷗外との世界像ないし自然観の違いが反映している。

[Fortsetzung folgt 続稿次号以下]

33) 福永武彦、前掲書、47頁。

34) 磯貝英夫、前掲書、176頁。